2024年8月4日
年間第18主日
菊地功大司教　メッセージ

「私が命のパンである」と宣言される主イエスの言葉を、ヨハネ福音は記しています。集まっている人々は、この世の生命を長らえるための食物を求めているのですが、イエスは永遠の命を与えるパン、すなわちご自身のことを語っておられます。

わたしたちはこの世界で生きていますから、「いまどう生きるのか」に関心を寄せてしまいます。しかし、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです」とペトロの第二の手紙の三章に記されているとおり、永遠に至る神の救いの計画から見れば、人間の人生における例えば百年は、一瞬にすぎません。わたしたち人類は、ほんの短い先すらも見通すことができず、いまを生きることに心をとらわれて、数々の過ちを積み重ねています。

その最たるものは、様々な理由を見いだして始められる戦争や武力紛争です。確かにその時点の世界における力関係では、戦争だけが選択肢に見えたことでしょう。しかし戦争を始めることは、命を危機にさらすことに他なりません。神の救いの計画の中では、賜物として神が創造し与えてくださったこの命を、すべからく守り抜くことこそが最も大切であるはずです。にもかかわらず、わたしたちは短期的な人間の視点から様々な理由を持ち出しては、護るべき命を暴力にさらし続けています。

ご聖体をいただくわたしたちは、ご聖体のうちに現存される主との一致のうちに、主が教えてくださる道を歩むように務めることで、自分自身の救いのためだけではなく、人類全体の救い、すなわち神の救いの計画に与り、その計画の実現のために働く者となります。視点を自分のうちだけに留め、短期的な思惑に振り回されることなく、ご聖体に現存される主イエスに生かされて、常に新たにされ、神の視点で世界を見るものでありたいと思います。

8月は、平和について思いを巡らし、平和を祈るときであります。広島、長崎における

原爆忌から終戦の日までの10日間を、日本の教会は平和旬間と定めています。

平和旬間にあたり司教協議会の会長談話を発表しています。今年はテーマを、教皇様が繰り返される言葉に触発されて、「無関心はいのちを奪います」といたしました。

教皇聖ヨハネ23世の「地上の平和」の冒頭には、「すべての時代にわたり人々が絶え間なく切望してきた地上の平和は、神の定めた秩序が全面的に尊重されなければ、達成されることも保障されることも」ないと記されています。したがって、神の定めた秩序の実現を妨げる出来事は、そのすべてが平和の実現を阻んでいると教会は考えます。もちろんその筆頭には、神からの賜物である命を暴力的に奪う戦争や紛争があるのは間違いがありません。

しかし同時に、神の定めた秩序の実現を阻む状況とは、武力の行使だけにとどまらず、ありとあらゆる命への暴力がそこには含まれています。神の秩序の実現を妨げ、人間の尊厳をないがしろにする現実は、神の平和の実現を阻害するものです。あらためて平和の実現を、祈りたいと思います。